

## 環境問題への仏教思想の寄与

小幡 範雄

### The Contribution of Buddhist thought to Environmental Problems

Norio OBATA

#### Abstract

Buddhism and environmentalism are a natural fit. This paper discusses the mechanism of environmental problems from the viewpoint of Buddhism. The point of the simple life in Buddhism is that it creates an environment where there is less likelihood of craving and greater likelihood of contentment. Buddhists may argue that the solution to environmental problems is ultimately to be found. Buddhists may thus end up with various compromises which take environmental issues seriously, but nevertheless do not result in complete purity in environmental matters. This fits in with the general Buddhist perception that ethics is not about gaining purity so much as following through a right intention. The earliest Buddhist soteriology was summarized in the Four Noble Truths: (1) suffering exists; (2) the cause of suffering is craving (attachment); (3) there is a way out of this suffering; and (4) this way is the Eightfold Path. The keynote of Buddhist economics is simplicity and non-violence. From an economist's point of view, the marvel of the Buddhist way of life is the utter rationality of its pattern.

Western economists give importance to maximizing profits and individual gains while the underlying principle of Buddhist economists is to minimize suffering (losses) for all living or non living things. Studies conducted by them have shown that human beings show greater sensitivity to loss than to gains and therefore people should concentrate more on reducing the former.

This paper showed the necessity of constructing applied Buddhist studies to solve environmental problems.

## 1. はじめに

地球規模の環境問題や身近な環境問題にしても徐々には対応策も検討・実施されているが、根本的な解決には至っていない、そもそも根本的な解決はないようにも思われる。全世界的で合意のえにくいと思われる間ほど解決には当然時間がかかりそうである。どこから論じればいいのかだろうか。

水俣病の発生から 70 年、足尾鉍毒事件から 150 年である。公害・環境問題が発生して今日までは僅か 100 年たらずしかたっていない。経済発展の影で資源・エネルギーの枯渇と地球温暖化による地球の危機的状況という 2 つの問題にまで発展してきている。地球全体を論じ、考えなければならぬ時期に来ていると思われる。地球温暖化は COP21 の合意文章には気温の上昇は産業革命以前に比べて 2℃未満に抑制する、さらに 1.5 度未満に収まるよう努力するとある。きわめて厳しいと思われるが環境にとっては明るい未来が感じられる。資源の枯渇も 50 年～100 年位で起こるとの予測も出ている。

本論文では、この問題の解決の糸口として、現代科学の基本的思考法の限界、並びに、従来の社会的価値観（西洋的価値観）の行き詰まりにあると考えて、それら諸問題を解決するヒント・智慧が仏教的思想、価値観にあるのではないかと考えている。仏教には、縁起、中道、少欲知足など私たちが生活するうえで参考になる教えが数多く存在している。環境問題の大きさ、影響の深刻さを考慮して、ものごとと人間のかかわり、人間の生き方・考え方を仏教の側面から捉えて、仏教思想と現在の環境問題につき合わせてゆきたい。仏教思想と一口に言っても多くの経典、文献などが過去の歴史のかなに存在する。ここでは、仏教で重要と思われる中道、他利、縁起、少欲知足の思想ともつたいない、ありがたい等という行動・意思規範から現在の地球環境問題への対応を考えていきたい。

## 2. 仏教的な環境のみかた

### 2.1. ライフスタイルと仏教の教え

大量生産・大量消費・大量廃棄という生活様式はすでになりたたなくなっている。これまでの大量生産、大量消費、大量廃棄の生産と消費のパターンを今後適切で適正な生産と消費はどうあればいいのだろうか。第二次環境基本計画では、「私たちは、選択肢として三つの道が考えられます。第一の道は、これまでの大量生産、大量消費、大量廃棄の生産と消費のパターンを今後とも続けていく道です。第二の道は、現在の社会のあり方を否定し、人間活動が環境に大きな影響を与えていなかった時代の社会経済に回帰する道です。第三の道は、環境の制約を前提条件として受け入れ、その制約の中で資源やエネルギーを効率よく利用する努力を行いながら、これまでの生産と消費のパターンを見直し、これを持続可能なものに変えていく道です」と述べている<sup>1)</sup>。

この答えはまさに中道で、持続可能な道といえる。

経済活動に限らず、欲望のままに行動すれば、やがて地球環境が破綻することは必死である。釈尊は、人間の欲望は本来限りのないものであり、一切の苦しみや悩みは、この欲望が満たされないときに起きると説いている。しかし、欲望は人間が誕生したとき以来の本能であって、要望は生活からは切っても切れないものである。欲望自体は滅失することはできないものである。この要望が満たされなかったとき起こる状態が仏教では苦悩（求不得苦）と呼ばれている。この苦悩＝煩惱から逃れるために、限りなき欲望を抑制する方法が少欲知足である。

往生要集には、「足ることを知らば貧といえども富と名づくべし、財ありとも欲多ければこれを貧と名づく。もし財業に豊かになれば、もろもろの苦を増すこと、竜の首多きもの酸毒を増すが如し。まさに美味は毒薬の如しと観じて、智慧の水をもって灌いで浄らかしむべし。この身をたもたんがために食すべしといえども、色味を貪りて驕慢を長ふことなかれ。もろもろの欲染においてまさに厭を生じ、勤めて無上涅槃の道を求むべし」とある<sup>2)</sup>。

また、中野孝次「清貧の思想」では、「足ることを知らば貧といえども富と名づくべし、財ありとも欲多ければこれを貧と名づく、という教えに当時、初めて接した人々には目の醒めるような新鮮な発見だっただろうと思う。この一言によってかれらの貧富観は革命的な衝撃を受けたにちがいない。かれらは、所有は多ければ多いほどよしとする感情、つまり欲望の支配する現世の価値に対し、目にみえないもう一つの価値の世界、すなわちブツダの教える心の救済にかかわる世界があることに目を開かれた」と述べられている<sup>3)</sup>。

さらには、ムヒカ前ウルグアイ大統領は、講演で、「私は貧しいわけではない。単に質素が好きなのだ。本当にやりたいことをできる自由がある。物が必要なわけではない。」と述べている<sup>4)</sup>。また、「私が思う貧しい人とは限りない欲を持ち、いくらあっても満足しない人のことだ。でも、私は少しのモノで満足して生きている。質素なだけで、貧しくはない」とも述べている<sup>5)</sup>。実にいい言葉ではないか。私たちはもう少し物欲に代わる新しい満足を探していく必要があるように思われる。ムヒカ氏は軍事政権下でゲリラのメンバーであったことがあり、投獄4回、脱獄2回、銃撃戦で6発撃たれ重傷を負ったこともある人だから出てくる言葉だと思う。同様な考え方は仏教のなかに存在する。

井上は、仏教経済学のなかで、幸せと経済学－「ありがたい」と「すまない」という部分で、  
幸せは、

幸せ＝財／欲望 という方程式で書くことができるとしている<sup>6)</sup>。

分子を大きくすることによって、幸せになろうとするのが欧米式であるとするれば、分母を小さくしようとするのが東洋式、いや仏教式といっている。この式は、欲が多ければ、もっと財を求めなければ幸せにならぬといっている。これに対して、ムヒカは分母を小さくして幸せを感じているのである。

ディーブ・エコロジーを唱えたアルネ・ネスが示したライフスタイルの一つの典型は、参考になると思われるので、ここにあげておきたい<sup>7)</sup>。

- ①質素な手段を用いる。
- ②反消費主義をとる。

- ③民族的・文化的な違いの価値を理解し、これを尊重する。
- ④欲望ではなく不可欠の必要を満たす努力をする。
- ⑤刺激の強い経験ではなく、深く豊かな経験を得ようとする。
- ⑥自然のなかで生きることを心がけ、利益社会ではなく共同社会の発展に努める。
- ⑦すべての生きものの真価を認め、これを尊重する。
- ⑧身近な生態系の保護に努める。
- ⑨人間が飼う動物と競合する野生生物を保護する。
- ⑩非暴力などに基づく行動をとる（同時に肉食主義に向かう）。

⑪第三世界、第四世界の状況を考え、自分の生活のあり方が貧困のなかで暮らす人々の生活に比べ、あまりにも高水準であまりにも違ったものにならないようにしようとする。ライフスタイルの地球規模の連帯をめざす。

⑫どこでも、だれにでも実現可能な生活のあり方の真価を理解し、これを尊重する。このようなライフスタイルとは、他の人々や人間以外の生きものに対しても、不正を働くことなく維持できる可能性を持つ生活のあり方である。

以上のように、ライフスタイルのあり方として、いずれも欲を少なくし、満足を得るようにすることが求められている。

## 2.2. エコロジーと仏教

何かひとつのものそれだけを取り出そうとすると、それが宇宙の他のあらゆるものと絡まりあっていることが分かると言われていた。仏教が救済を目指す対象は、一切の衆生である。一切衆生とは、この世に存在しているすべての生命・生物のことを指している。特に、人間（生に四苦八苦する凡夫たるすべての人間）のことを指していることも多い。この衆生はまわりの環境との相互作用によって存在するのである。この相互作用がなければ衆生は存在せず、自我は存在しないのである。このように、全ての現象・事物は何一つそれ自体で成り立つものではなく、無数の関係（縁）によって生じている。これが縁起である。

縁起は、因縁生起の略からきている。因とはその原因のことであり、縁とはその生じる条件のことである。世界の一切は、直接にも間接にも、何らかのかたちで、それぞれ関わり合って生滅変化しているという考え方を指している。

縁起の法の基本となる考え方は、次の文章で示される<sup>8)</sup>。

- ①これ生ずれば、かれ生ずる。これ滅すれば、かれ滅す。
- ②これ有れば、かれ有り。これ無ければ、かれ無し。

①は因果関係、②は相互関係を示している。①の因果関係は、現実の結果（果）には必ず、原因が（因）があり、それに縁（条件）が加わって結果（果）が生ずるということである。

地球環境問題や身近な環境問題でも、ほとんどが縁起にあてはまる。まさに、仏教思想はあたりまえのことを言っているようにも思える<sup>8)</sup>。

諸法無我は、すべてのものは他のものを縁として成り立ち、それ自体の固定的な本体を持た

ないという真理という意味である。この意味に登場する縁とは、縁起と同じ意味である。物事は一つ一つばらばらに存在しているのではない。すべてのものはそれぞれ関係しあって存在しているのである。

このように、この世に常なものなどない、すべてはつながっているのだと考える事が出来れば、涅槃寂靜に至る事が出来る。涅槃とは、炎を吹き消すという意味である。心の中の欲望の炎を消滅させればそこから起こる苦しみも解消され、静かな心の安らぎが得られるという事なのである。

縁起とは、この世のあらゆるものが一つとして独立自存のものではなく（無我）、また固定したものでもない（無常）、互に他と関わりあい（縁）、生かし生かされて成り立っている（起）という道理のことである。まさに生態系の見方そのものである。しかし、全体の目標そのものはどこにも明確にはないのである。生かし生かされているという関係性で生態系は成り立っているのである。この関係性が見えなくなっている、あるいは見ようとしめない態度が多くなってきている。自分中心という自己ばかりが目立ち、他者を慮るという利他の感情はなかなか生まれにくい。

縁起は、私の存在は、縁起として存在するのであって、私という一個の人間がそれだけで存在するのではなく、ありとあらゆるものとの繋がりの中で存在していることを表すものである。私たちの相互共存するのちの事実を言い当てている概念である。

安藤昌益は江戸時代の鉱山開発に対して、「金属は土や岩石の中にあって地面を固め、大地を清らかにし、流れを澄まし、人間の皮膚や骨や内臓を守っている。けっして破壊してはならない。採掘を進めてゆけば山はもろくなり、空気は濁り、人間は病気がちになる。きれいな水は流れてこず、山は崩れやすく、植物は生えず、川は土砂で埋まる。地震になれば以前より揺れる」と全体をみた反論を展開している。このような全体を見る必要がある<sup>9)</sup>。

縁起とエコロジーに近いものといえる。エコロジーとは、元来は、環境と生物との相互関係を研究対象とする学問である生態学をさす。エコロジー ecology という語は、19世紀ドイツの生物学者エルンスト・ヘッケルが、古代ギリシア市民の住居と生産の場を兼ねた家を意味するギリシア語のオイコス oikos と、学問を意味するロゴス logos という語を合成してつくった言葉である。

人類が資源・エネルギー問題とCO<sub>2</sub>排出による地球温暖化問題などにさらされるにあたって、このエコロジーという概念は、生態学さらには自然科学の領域を超えて、人間の生存条件、そのあり方を考えるうえで不可欠なものとなっている。

現在、社会的に合意が得られている事項は、人間社会の入口側からみた、

- ・再生可能のエネルギーに依拠すること
  - ・地下資源は、生態系に重大な変化を与えることのないよう、抑制と配慮をもって利用すること
- 出口側からみて、
- ・農業と工業の両面において資源リサイクルを実現して環境影響を少なくすること
- 変換装置としての基盤として、

・自然環境における生物種の多様性と豊かな植生を、回復し保存していくこと

このようなエコロジ的な考察によって与えられたことの実現可能性はまだら模様で未知数である。

アルネ・ネスは、環境へのはたらきかけのみを主張するのではなく、自己意識の変革をその思想の根本においている。すなわち、自己の拡大がおのずからの愛他の実践につながるのであり、「生物と風土とは二つの事物なのではない。……同様に一個の人間は、人間が全体の場のなかでの関係的な接合点である、という意味では、自然の一部になっている。一体化の過程とは、この接合点を定めている諸関係が拡大して、ますます多くのものを含む過程である。自己（self）が自己（Self）に向かって成長する」と説くのである<sup>10)</sup>。このようなエコロジ的収支のパラダイムの根本的転換を目指したものが表1である。従来の考え方である皮相エコロジを新しい見方である深層エコロジへとパラダイムシフトを図ることが環境問題の解決に必要となる<sup>11)</sup>。

企業活動を生命システムとして捉えたものがある<sup>12)</sup>。

企業は生命を持ったシステムとして理解できるとして、企業の新陳代謝フローを図1のように提案している。この新陳代謝のフローは、企業活動の監査のために作られたものである。企業の周りの環境から自然資源（太陽・水・空気）とエネルギー、原材料、人材等を取り入れ、企業のなかを通り（設計・加工・製造など）、外部へ販売して利益等を得るという関係を示している。

このように、仏教の縁起法は、欧米の要素還元主義の反対の概念であり、一切の事物、事柄の実体を認めないで、すべての物は周囲との関係性によって成り立つとしている。縁起法はみかたを変えれば、複雑系の研究に関連してくる。

表1：皮相エコロジと深層エコロジ<sup>11)</sup>

従来のパラダイム	新しいパラダイム
皮相（シャロ）エコロジ	深層（ディープ）エコロジ
人類至上主義（人間中心主義） 人間を自然の上または外に置き、自然に対しては、人間が利用すべき道具としての価値しか認めないという、人間を中心に置き、人間の利益を優先させようとする立場	エコロジ中心主義（地球中心主義） 世界を本質的に相互に依存し合った現象のネットワークと見、それぞれに固有の価値を認め、自然と自己とは一体であるとするより精神的、宗教的立場
物質中心主義的世界観 成長や進歩を量的に見ようとし、経済や産業を発展させることに意を用い、それが環境破壊をもたらす要因となっていることへの無自覚、無反省な自己優越的態度	地球家族的世界観 成長や進歩を質的にとらえ、常に次の世代に持続可能な社会を造ることを使命とし、そのための新たな倫理システム（実践倫理）を導き出そうとする自他協調的態度

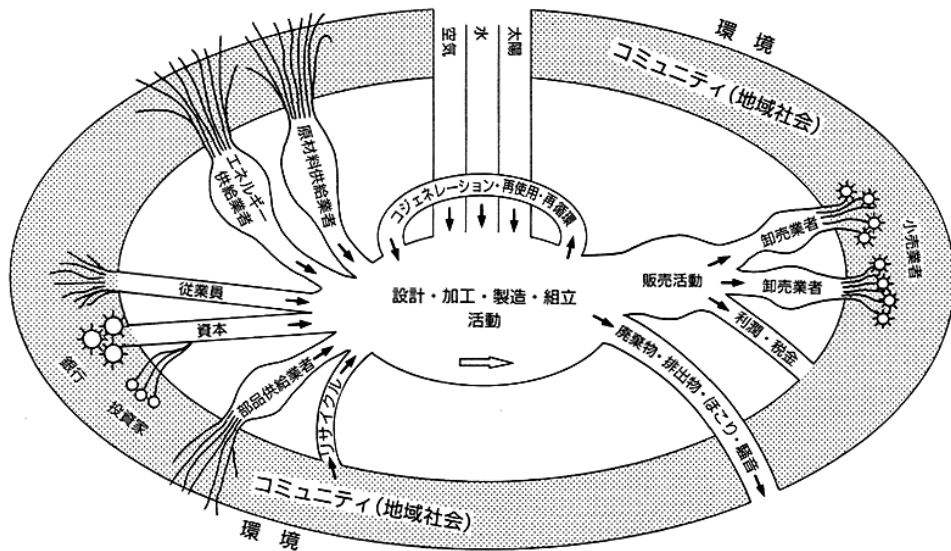


図 1：企業の新陳代謝の概念モデル<sup>12)</sup>

### 2.3. 仏教経済学と環境

仏教経済学は、E・F・シューマッハーが Small is Beautiful-Economics as if People Mattered - (1973) の第 1 部現代社会第 4 章仏教経済学で展開するまでは、実態の無きに等しいものであった<sup>13)</sup>。ドイツ生まれの経済思想家、E・F・シューマッハーが唱えた仏教経済学が目指すものは、簡素と非暴力、知足、中道と正しい生活、非貨幣的価値、量ではなく質、資源エネルギーの節約、真の豊かさや完全雇用、地域資源の活用 — などである。注目に値するのは中間技術という新しい技術観を唱えて、巨大技術を排していることである。これがスモール・イズ・ビューティフルというタイトルとなっている。

シューマッハーは経済学部で教えられている現代経済学（ケインズ経済学、新古典派経済学＝通称・新古典派総合、自由市場原理主義など）を精神性を欠いた経済学として、これは一時的な物的満足を与えるだけで、内的な達成感を与えないと感じていたのである。

もう一人、日本で仏教経済学に関わりをもつ人がいる。井上信一は、自らの永年にわたる銀行家（日本銀行、宮崎銀行）としての業務環境を通じて、仏教と経済を融合する事を通じて、日本における仏教経済学の構築に努められた数少ない経済人である<sup>14)</sup>。

先に述べたように、シューマッハーの本質は、大量生産・大量販売・大量消費という地球環境の汚染・破壊を防ぐ中間技術の提唱と「正命」という正しい生き方の追求と実践の必要性にあった。井上も自身が信心する浄土真宗の立場からこの二つの問題を晩年に注力され、地球を救う経済学－仏教からの提言（1994）を発表している<sup>15)</sup>。

シューマッハーと井上の仏教経済学に関わる比較をしたものを表 2 に示す<sup>16)</sup>。

表 2：仏教経済学における井上とシューマッハーの比較<sup>16)</sup>

主要項目	井上信一	シューマッハー
基本的態度	キリスト教・西洋近代批判	西洋近代批判・西洋中世は肯定
依って立つ根拠	浄土真宗	ローマカソリック
キーワード	1) 二つの気づき 2) 「三つの柱」	「正しい生活」(正命=生き方)
人間観	感謝・謝罪・自利他利円満	自己否定(懺悔)・利他主義
経済主体	自利他利円満	正しい生活
消費	少欲知足	最少の手段で最大の満足
財	宇宙からの預かりもの	一次財と二次財を区別
農業	宇宙の命に触れる	中間技術による開発に限定
職業経験	銀行員	経済顧問

表 3：現代経済学と仏教経済学<sup>17)</sup>

	現代経済学	仏教経済学
基調	富みへの執着と暴力、戦争 欲望の増長 労働の生産物重視 消費の重視 物質的価値の重視	簡素と非暴力 人間性の純化 労働者重視 創造的活動の重視 非物質的価値(正義、調和、美、健康)の重視
基本道徳	目先の利益、狭量で卑小、打算的	智恵、正義(真)、勇氣(善)、節制 (美=足るを知ること)
目標	唯物的な生活様式	中道=八正道の一つ、正しい生活
方法論	貨幣価値と数量化の重視	非貨幣的価値と質の重視
豊かさ観	適正規模の生産で消費の極大化	適正規模の消費で満足の極大化

仏教経済学と現代経済学の特徴は、表3のように示され、両者はかなり異なっている。仏教経済学は、簡素と非暴力、人間性等を重視し、正義、節制を基本目標にして、全体の目標を後に述べる八正道に置き、消費の極大化より満足の極大化を図るものである。しかし、従前の経済学を根本的に否定するものと捉えられ、仏教経済学が説いていることは至極まともであり、再考すべきときにきていると思われる。



### 3. 環境・資源と少欲知足の精神

#### 3.1. 枯渇する地球資源

エコロジカル・フットプリントは、経済活動が環境容量の範囲内にとどまったものとなっているかどうかを測定するための指標であり、カナダのプリティッシュ・コロンビア大学で開発・改良された。

エコロジカル・フットプリントの定義は、ある特定の地域の経済活動、または、そこに住む人々の一定水準の物質消費レベルの生活を維持するために必要となる生産可能な土地（及び水域）の面積（ある地域で必要とされ資源の要求量を生み出し、排出物質を同化してくれる土地・水域面積）の合計である。

エコロジカル・フットプリントは2010年で、全世界で2.6gha／人、アメリカで6.9gha／人、日本で3.9gha／人、中国で2.2gha／人となっている<sup>18)</sup>。世界の生産力は1.7ghaであり、世界がアメリカと同じような生活をする、地球は $6.9gha \div 1.7gha = 4.0$ 個いる勘定となる。また、全世界平均でみれば、地球1.5個分に相当する再生能力が必要である。

40年以上にわたり、人間の自然に対する需要は、地球が供給できる量を超過している。オーバーシュート状態は、木の成長速度よりも速く伐採し、海が供給するよりも多くの魚を漁獲し、森と海が吸収できるよりも多くの炭素を大気中に排出することによる。その結果、地球が吸収や再循環できる速度を上回る速度で、資源の縮小と排出物の蓄積が進行し、大気中の炭素濃度が上昇するなどの状態が発生している。化石燃料の燃焼により発生する二酸化炭素は、半世紀にわたり、人間のエコロジカル・フットプリントの最大の要素であり、いまだに増加傾向が続いている。1961年、二酸化炭素吸収地は総フットプリントの36%を占めていたが、2010年には、53%を占めるに至っている。

エコロジカル・フットプリントにはさまざまな批判もあるが、資源浪費にブレーキをかけなければならないのは事実である。さらに、いけばより多くの環境資源を消費する先進国とほとんど消費できていない開発途上国のバランスをどうとっていくかも鋭く問われている。

#### 3.2. 少欲知足

少欲知足の教えこそ、仏教の中心的役割を果すものであるとも言われている。

スッタニパータには次のように書かれている<sup>19)</sup>。

143：究極の理想に通じた人が、この平安の境地に達してなすべきことは、次の通りである。能力あり、直く、正しく、ことばやさしく、柔和で、思い上がることのない者であらねばならぬ。

144：足ることを知り、わずかの食物で暮し、雑務少なく、生活もまた簡素であり、諸々の感官が静まり、聡明で、高ぶることなく、諸々の（ひとの）家で食ることがない。

また、老子にも、自ら勝つ者は強し、足るを知る者は富めりと説いている<sup>20)</sup>。

この少欲知足については、多くの経典にさまざまな形で説かれているが、今は、多欲の人と少

欲の人を対比させ、両者の相違を具体的に説き示している。欲にかられた人はより多くの利益を得ようとあくせくするから、それだけ苦悩も多くなるのである。ところが欲をかかない人は、手に入れようともしないし、欲にかられて何かをしたいと思うこともないから、心の患いもないのである。少欲を実践する人は、心がいつも平らかで、憂いも恐れもなく、どのようなことに出会っても、ゆとりがあり、いつも満足しないことがない。少欲の者には安らぎというものがある。

また、知足については、もし様ざまな苦悩から抜け出ようと思うなら、足るを知るということをしっかりわきまえるべきである。足ることを知らない物は、物質的に裕福であっても心は貧しく、足ることを知る人は、経済的に貧しくとも、心は豊かなのである。

少欲知足には、ものを大切にし、節約するという精神も含まれる。

アンダーナがウダヤ王から、500着の衣を供養されたとき、王は尊者は500着の衣を一度に受けてどうしますか」とアンダーナに聞いたとき、こんなやり取りがある<sup>21)</sup>。

「大王よ、多くの比丘は破れた衣を着ているので、彼らにこの衣を分けてあげます」

「それで破れた衣はどうしますか」

「破れた衣で敷布を作ります」

「古くなった敷布は」

「枕の袋に」

「では、古い枕の袋は」

「床の敷物に使います」

「古くなった敷物は？」

「足ふきを作ります」

「古くなった足ふきはどうしますか」

「雑巾にします」

「古い雑巾は」

「大王よ、私どもは、その雑巾を細々に砕き、泥にあわせて、家を造るとき、壁の中に入れます」

日本においては、江戸が当時では世界有数の大都市でありながら、ものの修理やリサイクルが徹底していた背景には、鎖国政策により基本的に外から資源が入ってこず、また排出物も外に持ち出せない、閉じた世界であったことが考えられる<sup>22)</sup>。このように資源が有限であったために、大切に有効利用され、様々なリサイクル業が成り立ち、人々は経済的にも得になるという理由で使用済みのものをリサイクルに出していたのであろう。

江戸時代は現代に比べればものが少なく、ものが壊れても修繕して使うことが根付いており、使えるものは徹底的に再利用、再生利用され、そのための様々な商売が成り立っていた<sup>23)</sup>。

#### 1) 職商人

今なら捨てるほかないような品物を修理するのが本業だが、必要に応じて新品の販売や古物の下取りもした。職人であり同時に商人であった。提灯の張り替え、錠前直し、算盤直し、煙管を直す羅宇屋、炬燵の槽直し、など。

2) 修理・再生の専門業者

壊れてしまって使えないものを使えるようにするのが専門の職人。鍋や釜の穴あきを直すイカケ屋、壊れた陶器を直す焼継屋、下駄の歯入れ、包丁などを刃物で研ぐ研ぎ屋などの修繕屋業が成立していた。

3) 回収専門業者

リサイクル業の主流となる回収専門の業者で、不用品や今なら捨てるほかないものを買集める商人。紙屑は紙屑買いや紙屑拾いによって漉返紙に、ローソクの屑は蠟燭の流れ買いという専門業者が集めてローソクに、薪や炭などから出る灰は灰買いと灰屋によって肥料や酒のろ過やアクぬきに、再生利用された。

糞尿は肥汲みによって買い取られて田畑の肥料となり、生ごみもごみ取りという専門の収集人によって集められ堆肥にされ、食物の生産に役立てられる。生活排水については、水をきれいに使うための様々な掟が守られた上で、最終的に海に流れ込み、魚介類や海草の栄養源として利用された。

また、着物の循環が知られている<sup>24)</sup>。着物の一生は図2のように示される。見事な循環である。呉服屋で上級武家や富裕層に売られた着物は、古くなると古着屋にいき、一般庶民が行商の人から購入して着るのである。その後、今度は子供たちが着て、さらには風呂敷、下着になり、そしておしめ、雑巾になるのである。この雑巾の後は、燃やされて、灰となり、農地に返されるのである。農家は綿や麻を育てて、それを加工して呉服を作ることになる。完全な循環をなしているのである。

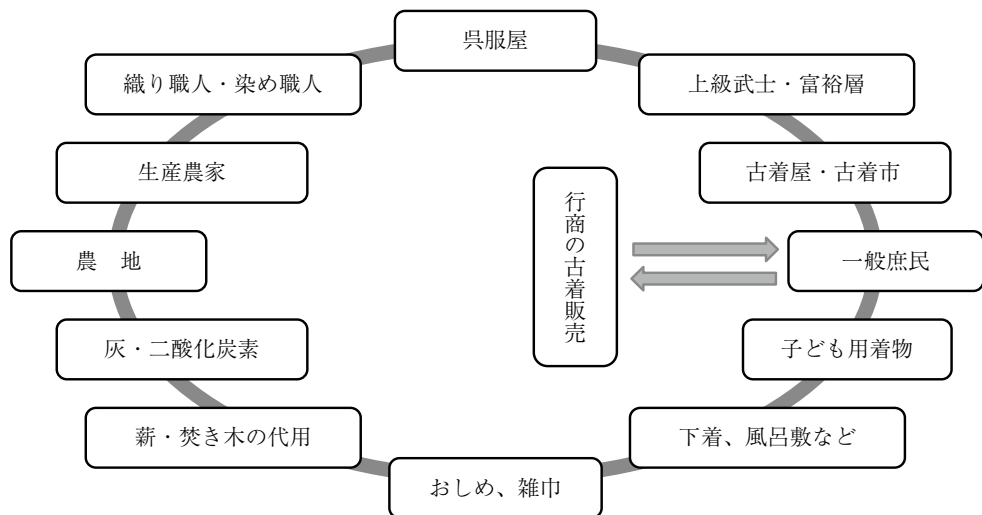


図2：着物の一生

完全な循環には稲藁の循環文化がある<sup>25)</sup>。稲作の副産物である藁は、米一石（150kg）当り、約 33 貫（124kg）程度とれる。今は、ほとんど利用されず、産業廃棄物扱いであるが、昔は捨てるどころか貴重品であった。収穫された藁は、日用品に 20%、堆肥や厩肥などの肥料に 50%、燃料ほかに 30%と 100%完全利用であった。さらに、燃やした後の藁灰もカリ肥料となった。いずれ最後は大地にもどる。

衣の分野では、編笠、背中当て、蓑、草鞋、藁草履、他、きりがなくらい。昔の農家では、一人一年間に、背中当てと蓑が各 1、藁草履が 15 足、草鞋が 10 足程度必要とされた。さらに、いたんだ草鞋は街道に捨てられた。この草鞋が拾い集められ、堆肥となったのである。

食の分野では、米俵、酒樽の薦、どびん敷き、釜敷き、納豆作りの藁苞、家畜のえさ、厩舎の敷藁。

住の分野では、しめ飾り、屋根、畳（の中身）、むしろ（敷物）、土壁の補強材、と身の回りのものはほとんどが稲藁でできていた。

### 3.3. 二項対立から第3の道—環境を分断して見ることの不都合—

山本は、地球（宇宙船）倫理として重要なことは、これまでの発想であった「あれを取るか、これを取るか」という二者択一的な倫理ではなく、どちらも生かしていく発想だと述べている<sup>26)</sup>。仏教の中道の智慧に基づく発想は、そのどちらも生かしていく発想である。全体的な調和を重要視するのである。その意味では、仏教はもともと「あれを取るか、これを取るか」というよりも、そうした問いそのものを立てないことは前にすでに述べた。

地球環境問題が深刻化した背景には、経済と環境の不幸な分離がある。経済と環境を統合することで、持続可能な発展の概念・具体的方法論を構築することには異論はないと思われる。しかし、具体的な統合の方向性となると、多くの課題があることも事実である。つまり、生態と経済はともにオイコス（生態系）を語源にしており、システム境界内では、ともに類似した方法論、概念を用いているが、経済システムから見ればその境界外が生態系、生態系から見ればそのシステムの外が経済ということになる。経済、生態双方が伝統的なシステム境界に固執する限り、パラダイム転換は起りそうにない。

この不幸な分離を超えるためには、今までの環境・生態か経済・経営か、というような二者択一的発想を転換する必要がある。その枠組みとして、図3に示す環境思考Zモデルを提案してきた<sup>27)</sup>。図3において、リンク（a）は、人間（集団）相互の関係を表し、社会科学が守備範囲としてきた。リンク（b）は、環境と環境という自然相互の関係を表し、自然科学が食物連鎖や物質循環等に代表される生態系を対象としてきた。

経済システムと生態システムがその境界を拡大し統合化を目指すことは、図3のリンク（c）を明確にすることにほかならない。環境からは当然、資源・アメニティという有形、無形の恵みを受ける。また、経済・経営活動を維持するため、生じた廃棄物、排熱を環境に放出する。しかし、環境への負荷が過大になれば、場合によっては災害、健康被害というしっぺ返しも来る。環境が不健全であれば、その修復・改善は不可欠になる。リンク（c）の双方の矢印のバラ

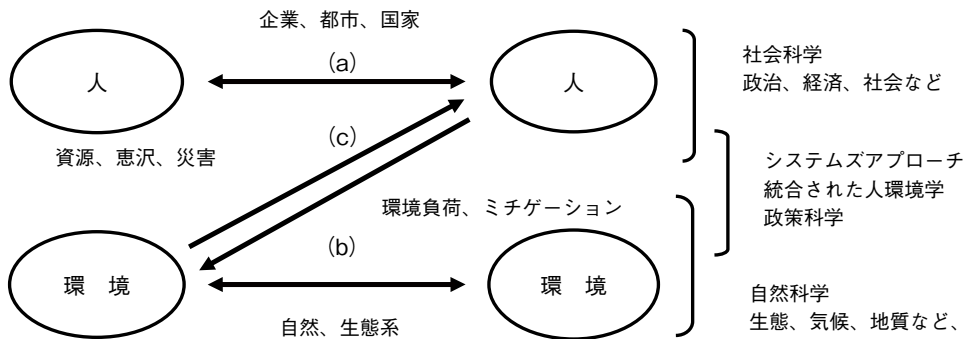


図3：環境思考Zモデル

ンシングを認識することが、持続可能な発展を具現化する制度・技術の設計（例えば、環境税、包装廃棄物法、再資源化技術）、産業構造の再編、あるいは環境倫理、経済倫理の醸成へのインパクトの鍵を握ることになると考えるのである。

この構図の中で経済と環境とどちらを重視するのかとか、そういう問いを立てない。これがどのような関係を持っているかを検討することが、宇宙船倫理に対して求められる発想になる。地球全体が一個の乗り物であって、この中で我々は生きていかなければならない。この中でいかにうまく調和を保って生きていくかが問われるのである。だから、そのときにどれを大事にするかではなくて、全体を含めて大切に扱っていく必要がある。

環境は、「広義には主体たる人又はものの存立する場であつ主体との間にある種の因果関係又は相互作用関係をもつすべての場」と定義されている。

例えば、沿岸域は海と陸が接する空間として〈存在〉するが、沿岸域の環境水準が良いか悪いか、あるいはどのような価値をもっているかという〈状態〉は評価する主体が沿岸とどのような〈関係〉にあるかによって規定されるということである。

これまでの環境研究においては、〈状態〉の解明および〈状態〉の改善という面からは数多くの研究・技術開発がなされてきた。それに対して、主体と環境系の〈関係〉に着目した研究は、相対的に遅れているといえる。現在、地球的規模の環境問題が世界的な関心を集めているが、この問題は先進国と途上国との関係調整なくしては解決できない問題である。あるいは価値観の多様化、個性化のなかで個人や集団が理想とする環境像、いかにすれば環境に対する認識、意味づけも多様化しており、環境政策に対する社会的合意を形成することがますます困難になっている。これらの問題を解決するためには、人と環境をめぐるさまざまな〈関係〉を解明し、〈関係〉のシステムを調整するための研究は今後ますます重要となる。

## 4. 環境問題解決への仏教の寄与

### 4.1. 環境要素の連結と縁起

仏教では、この世界にあるものは、細かな部分がよせ集まってできているが、水素と酸素で水ができたり、細胞が集まって生物の命ができるように、部分部分の縁が集まると、その部分部分を全部たした以上の全く新しい何かが出来てくると考えるのである。CO<sub>2</sub>と光があれば、植物は有機物をつくるのである。単純な足し算にはならず、別のものが誕生するのである。また、医者が患者を診察する場合も、全体として具合の悪そうなところを問診して病気を見つけるのである。決して小さな細胞から順次合成された器官の良し悪しを判断することはない。

環境の現象は多くは要素要素が関係しており、この関係を把握しなければならないのである。つまり、かかわり合いにより縁が集まって存在が成り立つと、さらにその集まった存在にプラスアルファの関係性が生まれてきて、それがすべてに連鎖していると思うるのである。縁起は関係性の理論となっている。そして、このような関係性の世界においては、従来の局部の実体のみを理屈で追い求める要素還元的な思考では、ものや現象のありのままの姿を見極めることは不可能に近いところもある。

すべての存在が、他の存在との関係の中で、別の言い方をすれば他の存在を自らのよりどころとしながら存在しているということは、すべての存在はその関係が変化をする中でそれ自身も変化をするのであり、実体として永遠に変化をしない存在はないということである。これは諸法無我である。

従来の科学や社会的価値観（西洋的な価値観といってもよいと思う）の基本的思考方法は、例えば一つの事柄やものの構造・本質を解明する場合、その前提として、複雑なものや事柄の全体は、それを構成する部分からなると考える。そのため、事柄の本質を明らかにするには、その全体をひとまず単純な構成要素である部分へと分解・分析し（要素に還元する）、その分割した部分の本質をある程度解明した時点で、再度結合すれば、全体の本質が解明できると思考するのである。

しかし、仏教においては、ものや現象のありのままの本当の姿を把握するには、部分部分の実体を理屈で追究するのではなく、縁により生じたプラスアルファの関係性をも含めた全体をいちどきに洞察するという方法をとる。

生態系や地球環境問題のように複雑な問題を要素に分割して考察することと、全体を一つのストーリーの中で、例えば、八正道のような思考で検討することも重要なものとなる。

### 4.2. 八正道と持続可能な発展

釈尊の最初の説法は、中道と四諦八正道だといわれている<sup>28)</sup>。

四諦とは、苦という人生の本質、苦の原因、原因の消滅、苦の原因を取り除く方法論をまとめた4つの真理である「苦・集・滅・道」のことである。すなわち、

苦諦（くたい）：一切は苦であるという真理。人生とは本質的に苦である。

集諦（じったい）：苦には原因があるという真理。人生が苦である事の原因を明らかにしている。

滅諦（めったい）：苦は滅するという真理。苦の原因である煩惱（ぼんのう）の消滅が苦の消滅。

道諦（どうたい）：苦を滅する道があるという真理。苦の原因を取り除く方法を説く。

私たちは、この道理を正しく認識する智慧を有しているだろうか。答えは否である。このような認識を持たないために、自己中心的な自我（エゴ）にとらわれ、空しい人生を送っているのである。釈尊は、この思い通りにならない空しい人生のあり様を苦と把え（苦諦）、苦の原因は自我に対する執着にあるからして（集諦）、その執着を断ち切るためには、八項目の実践（八正道）が必要であり（道諦）、その実践によって智慧を確立して縁起の法に目覚め、理想的な人生を実現することができる（滅諦）、と説いたのである。これが四諦八正道といわれる仏教の基本的教説である。

鶴田は、次のように地球環境問題と四諦を結びつけている<sup>29)</sup>。

「さまざまな環境破壊の実態を直視することは「苦諦」ととらえることができるだろう。環境問題という地球社会の苦悩の原因を反省し探求し、それをはっきりと悟ることは、「集諦」そのものではないか。持続可能な社会のビジョンとしてのエコトピアは、一切の苦悩を消滅した安穩の境地、つまり「滅諦」と言えよう。そして、生態学的倫理に基づいたシンプルなライフスタイルの選択、利益至上主義という貪欲に根ざした経済システムから真に持続可能な経済システムへの移行など、環境問題を解決するためのさまざまな提案の実践は、苦悩を滅するための修行、つまり「道諦」と言えよう」。

八正道とは、以下に記す8種の道を常に守り行うことによって、悟りが得られ、理想の境地であるニルバーナ（涅槃）に到達されると説くものである。

- (1) 正見（しょうけん） 正しい見解、人生観、世界観。
- (2) 正思（しょうし） 正しい思惟（しい）、意欲。
- (3) 正語（しょうご） 正しいことば。
- (4) 正業（しょうごう） 正しい行い、責任負担、主体的行為。
- (5) 正命（しょうみょう） 正しい生活。
- (6) 正精進（しょうしょうじん） 正しい努力、修養。
- (7) 正念（しょうねん） 正しい気遣い、思慮。
- (8) 正定（しょうじょう） 正しい精神統一、集注、禪定（ぜんじょう）。

最初にこの八正道が確立し、それに基づいて四諦説が成立すると、その第四の道諦はかならず八正道を内容としている。八正道から道諦へ、そして四諦説が導かれたと言われている。

八正道とは、文字通り八項目からなる正しい実践ということであるが、ここにいう正しいとは、具体的にはどのように解すべきであろうか。斎藤は、欲望はなくすのではなく、抑制することが大切だと述べ、その中で仏教の説く四諦八正道を取りあげ、八正道の正、すなわち正しいとは、抑制のきいたと読みかえたい、といっている<sup>30)</sup>。元来、欲望を抑制することを眼目とする仏教の立場からすれば、まさに適訳といえることができるであろう。八正道はまた中道とも

いわれる。中道とは、極端を離れ、一方に偏ることなく、調和のとれた節度ある生き方をいうのであって、自然との調和、他との共生を理想とする環境問題に対しても、その実践原理として十分その役割を果たしうることが明らかとなるであろう。

鶴田も、地球の八正道を次のように述べている<sup>31)</sup>。

正見：人間中心のものの見方を捨てて、あらゆる生命を公平に扱うディープ・エコロジーの見方に従う。

正思：ものの考え方を人間本位にかたよらせることなく、地球的視野に立って正しく考える。

正語：環境を大切にしていないのに、大切にしているといった「妄語（うそ）や「両舌（二枚舌）」「綺語（口から出まかせのいいかげんな言葉とを使ったり、あるいは環境を大切にしている人の「悪口（わるくち）」を言わない、正しいものの言い方をする。

正行：意味なく動植物の命を断つ（殺生）ことなく、自然から盗むこと（偷盗）のない清らかな日常の行動をとる。

正命：他の生物の迷惑になるような仕事、地球のためにならないような職業によって生活の糧を得るのではなく、地球のためになる職業によって、正当な収入で暮らしを立てる。

正精進：地球を害するような諸々の悪をなさず、常に正しい行ないをして、怠ったり、脇道へそれたりしない。

正念：常に地球を心に持ち、地球の方向に心を向け続ける。

正定：常にエコロジーの法則を念頭に置いて、周囲の変化にぐらつかないようにする。

## 5. 持続可能な社会への転換と応用仏教学

持続可能な発展といわれてかなりの時間が経っている。社会・経済制度や技術開発の面での対策は炭素省エネ技術、固定化技術や排出権取引制度など数多く検討、実施されてきている。この論文では、仏教思想に焦点を当てていま一度別の視点から持続可能性をみてきた。

安原は、持続的発展の思想と宗教とは深い関係にあり、特に、持続的発展に仏教思想がどのように具現化しているのか次のように述べている<sup>32)</sup>。

第一に持続的発展は、人類に限らず、生きとし生けるものすべての共生・平等の思想であり、そのいのちの尊重であり、仏教思想の共生と生命中心主義の具現化であること。

第二に持続的発展は、量の拡大ではなく、質の充実を意味しており、これは貪欲の否定と知足のすすめ、さらに中道という仏教思想の反映であること。

第三に持続的発展は、戦争、軍備の増強などの暴力を拒否しており、これは仏教の不殺生や少欲知足、中道の思想とつながっていること。

第四に持続的発展は、浪費、廃棄、破壊を拒否し、節約、循環、保全をすすめており、これは仏教の不偷盗戒（ふちゅうとうかい＝盗みをしないこと）、少欲知足、共生、中道の思想につながっていること。

リオ宣言は「持続的発展と質の高い生活を達成するために、持続不可能な生産・消費を削減



すること」と述べて、持続不可能な生産、消費につきものの浪費、廃棄、破壊を否定している。一方、仏教が説く不偷盜戒についてここでは、その盗むという行為を広い意味に理解したい。

例えば大量生産－大量消費－大量廃棄という現代の経済構造の中での資源、エネルギーの浪費、廃棄は地球や自然からの必要以上の無用な強奪、つまり盗みである。失業と不完全就業による人的資源の浪費も、人から仕事の機会を奪うのだから、盗みといえる。

一方、持続的発展は節約、循環、保全のすすめであり、これは少欲知足の実践であり、自然との共生を目指す実践でもある。同時に持続的発展は浪費、廃棄、破壊という悪しき振る舞いやその社会システム・構造を拒否する。ここでもまた中道のまっとうな道理に合った経済、社会、生活を目指すことを意味する。

以上のように持続性（＝持続的発展、持続可能な発展）は通常理解されているような「経済と環境の両立」という程度の狭い概念ではない。多様で、幅も深みもある歴史的な概念、思想と理解したい。

辻井も、融合への視点に成立する仏教経済思想の特徴は、

- ① 私的利益追求第一主義への疑念（自利利他不二）
- ② 足るを知る事（中道＝節約、質素）
- ③ 物質文明の限界に着眼（近代工業文明の限界）
- ④ 自然・環境と人間の平等・共生（地球環境の保全）
- ⑤ 非貨幣的価値の尊重（自然・環境生きがい、ゆとり等）

にあると論述している<sup>33)</sup>。

このように、仏教思想は環境問題の解決に寄与するものと考えられる。しかし、このような仏教の寄与だけで何か物足りないような気がしてならない。これらは少なくとも各学問分野でも考えられているだろう。環境問題は今に始まったものではない。水俣病という公害を直視し、その連続性で考えなければならない。

文芸評論家である若松は、石牟礼の著書『苦海浄土』の解説の中で、チッソの犯した罪は許されざるもので、どこまでも明らかにされなくてはならない、償いも真の限界まで行わなくてはならないとしたうえで次のように述べている<sup>34)</sup>。

罪を糾弾するだけで終わってもならない。それは、患者たちが苦しみと悲しみの果てに見出したものに耳を閉ざすことになる。背負いきれないような苦難を背負ってもなお、世界は美しいと語る無名の人々の言葉－そして、それによって照らし出される、私たちが日頃見逃している世界の輝きも－見逃してはならない。言葉の出ない人たちは作品の素材ではあるが、作品を超えた存在だとしたのである。公害の被害の解明はどのような視点で行うかによって違ってくるのである。患者の人たちの未来は浄土につながっているのである。まさに、浄土を見るのである。いかに厳しい状況にあっても別の世界像を見るのである。

この浄土に関わって、公式確認 60 年を迎える 2016 年の熊本新聞元日版に次のような水俣病患者の家族の記事があった<sup>35)</sup>。「なぜ涙を流すのか、どこか痛いのか、何が欲しいのか。実子さんは言葉を発することができないため、周囲は理解できない。それでも家族は、試行錯誤し

て介護し続けてきた。リビングの窓からは、夕日に輝く水俣湾が見える。・・・(略)・・・お互いに見守り合いながら暮らしていけるような集合住宅の建設だ。ただ、こうしたニーズがあることを、チツソが実子さん方を訪ねて聞き取っていくことはない。実子さんとチツソの接点は、月々の年金や医療費だけ。下田さんは「患者が認定されたら、金を支払ってあげればいい。そう思っているのではないかと勘繰りたくなる」とチツソの態度に疑問を感じている。

患者の補償を超えたまさに人間的な対策が必要なのであろう。これが浄土であらう。これらを扱う学問分野として、応用仏教学のような体系を構築する時代が来ているように思われる。

## 6. おわりに

地球環境問題や公害に対して、仏教の思想に何ができるのかを述べてきた。仏教と環境問題について多くの文献や論文が出ている。

四諦、八正道、中道、縁起はそれぞれ生態系や環境問題の解明、持続可能な発展のもう一つの有益な思想となっていることを示した。しかし、これはまさに教えであり、実行・実践の可能性、実現の可能性について何も答えていない。仏教の教えを実現している国もある。ブータンである。GNH（国民総幸福量）を指標に掲げ、各種の政策を実施している。

地球温暖化を防止するパリ協定が締結されているが、これが実現できるかどうかは数々の疑問も指摘されているが、全体的には多くの賛意を持っている国々がある。これも一つの教えと見ることもできる。

今後は、2000年近くの歴史を持つ仏教を環境問題などを考察する学問として、応用仏教学のような体系も考える必要があろう。

引用・参考文献

- 1) 環境省：環境基本計画－環境の世紀への道しるべ、ぎょうせい、2001年、p1－2
- 2) 源信、石田瑞麿（訳注）：往生要集、岩波文庫、1992年
- 3) 中野孝次：清貧の思想、草思社、1992年
- 4) 佐藤美由紀：世界でもっとも貧しい大統領ホセ・ムヒカの言葉、双葉社、2015年
- 5) 朝日新聞、2016年4月1日
- 6) 井上信一：地球を救う経済学－仏教からの提言、鈴木出版、1994年
- 7) アラン・ドレングソン・五上有一共編、五上有一監訳『ディープ・エコロジー－生き方から考える環境の思想』、昭和堂、2001年、p93－94)
- 8) 角田泰隆：続 仏教と環境、駒澤短期大学佛教論集第4号、1998年
- 9) 坂本尚：世界初の「公害」論－江戸時代の思想家・安藤昌益に学ぶ（農山漁村文化協会：江戸時代にみる日本型環境保全の源流、2002年、p277－278)
- 10) Arne Naess, Ecology, community and lifestyle, Cambridge University Press, 1989, p.56, アルネ・ネス著、斎藤直輔・関龍美訳『ディープ・エコロジーとは何か－エコロジー・共同体・ライフスタイル』、ヴァリエ叢書4、文化書房博文社、1997年 p92)
- 11) 田中良昭：禅の浄土観と現代の環境問題、駒澤大学佛教学部研究紀要第56号、1998年、p185
- 12) E・カレンバック、F・カプラ、S・マーバーク、鶴田栄作訳：エコロジカル・マネジメント、ダイヤモンド社、1992年
- 13) E・F・シューマッハー、小島慶三・酒井懋訳：スモール・イズ・ビューティフル 人間中心の経済学、講談社学術文庫、1986年
- 14) 辻井清吾：井上信一氏における仏教経済学の構築について、印度学佛教学研究第58巻1号、2009年
- 15) 井上信一：地球を救う経済学－仏教からの提言、鈴木出版、1994年
- 16) 辻井清吾：井上信一氏における仏教経済学の構築について、印度学佛教学研究第58巻1号、2009年
- 17) 田中良昭：禅の浄土観と現代の環境問題、駒澤大学佛教学部研究紀要第56号、1998年
- 18) WWF：生きている地球レポート2014、2014年
- 19) 中村元訳：ブッダのことば スッタニパータ、岩波文庫、1984年
- 20) 老子、蜂屋邦夫訳注：老子、岩波文庫、2008年
- 21) 仏教伝道協会：和英対照仏教聖典、仏教伝道協会、1975年、p437－438
- 22) 読売新聞：2001年5月10日
- 23) 石川英輔：大江戸リサイクル事情、講談社文庫、1997年
- 24) 菅野俊輔監修：図説世界があつと驚く江戸の元祖エコ生活、青春出版社、2008年
- 25) 宮崎清：藁I（ものと人間の文化史）、法政大学出版局、1985年
- 26) 山本修一：仏教の中道論と環境問題、東洋学術研究通巻160号（47巻1号）、2008年
- 27) 小幡範雄：複雑で多様な環境をみる目を持つ、サステナ28号
- 28) 瀬戸内寂聴編：仏教ハンドブック、三省堂、2000年
- 29) F・カプラ、A・カレンバック、鶴田栄作編訳：ディープ・エコロジー考 持続可能な未来に向けて、佼成出版社、1995年
- 30) 斎藤茂太：少欲知足のすすめ、佼成出版社、1989年
- 31) F・カプラ、A・カレンバック、鶴田栄作編訳：ディープ・エコロジー考 持続可能な未来に向けて、佼成出版社、1995年
- 32) 安原和雄：連載・やさしい仏教経済学－(22) 持続性と発展と地球環境時代と / (21) 多様性は共生

と寛容を世界に広げる、2010年 (<http://chikyuzana.net/archives/4404> : 2017年1月)

- 33) 辻井清吾 : 仏教経済思想と現代社会のあり方への一考察、印度學佛教學研究第50巻第1号、2001年、p287 - 88
- 34) 若松英輔 : NHK ブックス 100分 de 名著石牟礼道子『苦海浄土』、2016年9月、p15
- 35) 熊本日日新聞 2016年01月01日